



読書感想文コンクール

**わたしの漱石、
わたしの一行**

中学生の部

最優秀賞	13
朝日新聞社賞	14
紀伊國屋書店賞	15
新潮社賞	17
優秀賞	18
佳作	21

高校生の部

最優秀賞	37
朝日新聞社賞	38
紀伊國屋書店賞	40
新潮社賞	41
優秀賞	42
佳作	45

百年の意味

筑波大学附属中学校 3年

堤 千佳

作品名『夢十夜』

選んだ一行

百年待っていてください

ここ数年、分厚い本に辟易していた私は、テンポのいい短編集へと自然に手が伸びた。

何気なく選んだが、怪談好きの私のストライクゾーンに、バシッと入り込んで来た『夢十夜』。こんな夢を見た、から始まる十の夜は、言葉が役割とリズムを持ち、幻想的で、夏の怪談のようにぞわっと怖く、雲に乗ったかのようにふわふわした感じから出来ている。

「百年待っていてください」

第一夜の、美しい女性が話すこの一文が、頭からも心からも離れず、切なくなつた。

漱石に対し気難しい優等生作家の印象しかなかった反動からか、

意外な物語の運びに吸い込まれ、どんどん世界が膨らんでいった。

何にこんなにも心を引きつけられたのか。夢だから何でもありなのに、ほとんどの背景が闇の黒い色。怖い。そこに星のきらきらした色、女の人の赤い唇、真珠貝の銀色に輝く色、百合の花の純白、文を読んでいのに、絵を見ているような不思議な感じだ。

その上、引き込まれたのは、私自身も表現するのが難しい不思議な夢をよく見るからだ。

夢には、自分の願望、思い出、後悔そして未来への希望までも現れる。自分の心の奥に潜んでいるかわいいた使も、憎たらしい悪魔も登場し、辻褄の合わないストーリーに心を奪われ、目が覚めてしばらくぼーっとしながら夢を反芻する。一日のスタートが良いか悪いかの別れと言っても言い過ぎではない。

漱石の書いている夢は実際に見たものではないかもしれないが、心の闇を吐き出している所は同じように思う。ただ、私には死の恐怖などがわからない。生きる喜びもいまひとつわからない。歳を取って、大きな病気をした時にこそ、この本をまた読んでみたい。

今年が漱石の代表作『こころ』の連載が新聞紙上で始まって百年にあたるそうだ。人に忘れられずに百年も持ちこたえる事の大変さ、人の寿命としても、手が届きそうで届かない時間の長さ、そう、百年というのには憧れでもあり、努力と継続の賜物であると思う。

百年後の現代にも通じる漱石の言葉、百年待ってくださいという文章は、恋だ、運命の人だ、生まれ変わっても一緒に、という少女

漫画的な面だけでなく、漱石の心から発する自分の作品への、あふれる愛情をも感じる。

私も真似して書いてみると面白そうだ。

「こんな夢をみた…」、こういう日記も、自分で気づかない自分の心を写す鏡となるかも。

文章とは、人を動かすエネルギーとなる。

文章をかたち作る単位となる言葉とは、そのエネルギーの源だ。

使い方一つで、優しく暖かい毛布にもなり、鋭い刃物にもなる。

そんなことを常に、意識したい。

そして、こんなに短い文でも、ずしっと重く、長い時代を超えても、心にこっそり落とし物をして行く、不思議な魔力を味わうため、もっともっとたくさんの本と出会ってみたい。

審査講評

「百年の意味」を一生懸命考えたことがよくわかる。なぜ漱石文学は百年後にも読まれているのか、そのことについても自分の頭で考えている。作品をしっかりと読み込んでまとめており、文章にも力がある。

《中学生の部》

朝日新聞社賞

一行の重み

暁星中学校 2年

長 建吾

作品名『坊っちゃん』

選んだ一行

頭の上には天の川が一筋かかっている。

僕が心に響いた一行は、『坊っちゃん』第八章の最終行、「頭の上には天の川が一筋かかっている。」だ。

この一行は一見して、会話文でも心情を説明している文でもない、ただ、空の状況を説明しているだけの文に思える。

しかし、実はシンプルな文だからこそ、より主人公の心情の変化が読者に伝わるのだということを、僕は小説を読んで感じるようになった。

この時の小説の場面は、主人公が対立する人々や考えとの関係に悩み苦しんだ後、自分独自の考えにめざめ、真っ向から対立することを決めた決意の場面だと思う。

決断の瞬間は、主人公にとって今までかかっていた霧が晴れ、一斉に視界が開けた解放感に満ちていただろう。

その時の主人公の解放感、満足感を的確に表す一行として、「頭の上には天の川が一筋かかっている。」は重要な役割を果しているように思われる。

主人公の心情をそのまま書くのではなく、その場の状況を映し出すことによって、逆に読者に主人公の心情の変化を分かりやすく示しているのだ。

また、この一行を、章の最後、しかも文末に持ってきたことも、より一層読者に感動を与える一因になっているのではないかと考えられる。

例えば、この章の最後が、「よし、いくぞ！」や「絶対に負けてたまるか。」などの主人公の心情そのままの文だった場合、主人公の意気込みは伝わるものの、勢いだけが伝わってその章が終わった収束感というものがいまいち伝わらず、勢いに乗せられただけの読者が、前章を引きずったまま次章に入ってしまう様に思える。

だが、章の最終文を客観的な空の状況を表す文にすることにより、読者にも章が終わった収束感、主人公の変化が客観的に伝わり、主人公とともに次章に突入する気持ちになれるのではないだろうか。以上が、僕がこの一行を選んだ理由だ。

一行の重みに気づくことで、漱石が文章の構成にも気を配っていたことが分かり、より作品を味わって読むことが出来るようになった

た。

これから多くの作品に出合っても、一行一行丁寧に読むことの大切さを忘れずに、本と向き合っていきたいと思う。

審査講評

文章のリズムが良く、中学生とは思えない作品。「一行の重み」を自分の言葉でよく説いている。

《中学生の部》

紀伊国屋書店賞

先生、先生には「**こころ**」があり、生きていました

日本女子大学附属中学校 3年

高野 真子

作品名 『こころ』

選んだ一行

私はしかたがないから、死んだ気で生きていこう

「私はしかたがないから死んだ気で生きていこう」この一文を選

んだ私は、先生に聞きたい。「先生の生きるとは何でしょうか。」

先生は、Kが死んでから、自ら死んだ気で生きていく、という覚悟を決め、常に罪という縄で心を縛っていた。その覚悟には、先生の叔父が深く関わっていたと思う。両親を亡くした先生が、一番に信じ安心感をおいていた叔父。そんな叔父に財産を全て持っていく。しかし先生にとっては、財産を持っていかれたことへの怒りではなく、自分の信じていた者からの裏切りという行為の残酷さに刻みつけられた。その残酷さは、先生の心に穴を開け、頼るものを無くし、人の優しささえ疑いの目でしか見られないようにさせた。

先生は心の虚無感と人を信じることの恐れに溺れ、苦しみ、喘いだ。裏切られた側の辛さを知っている先生だからこそ、自分が裏切った側に立った時、罪の重さを倍以上に感じ、また自らへの失望感に襲われたのだと思う。

それから先生は生きることの罪に縛られていく。妻の母の看病も、妻への優しさも、Kの墓参りも…全てに罪悪感が伴い、償いへの感情が支配する。その先生の心は孤独であり、先生自身の感情さえも、罪悪感と自らへの失望で消してしまふ。自分すら受け入れることができなくなってしまう先生は、ただただ、死ぬまで闇の中を歩こうとしたのだろう。

しかし、ここで主人公の「私」が先生の心に入り込んでくるのだ。何も知らない「私」は、何かを悟ったような先生に憧れ、先生を慕い、先生に何でも聞こうとする。そんな「私」はいつも先生に真っ

直ぐであり、純真だった。時にはその純真さが先生には目を背けたくなる程の眩しい光になり、時には先生の心を溶かす光でもあったと思う。先生はそんな「私」を見て昔の自分に当てはめたのか、またあなた（「私」）が思う程に私はできた人間ではないと忠告するようになり、そしてまた先生の最期の投げ所として、少しずつ心を打ち明け始めた。そして最期、先生は「私」に全てを書き残す。先生はいつでも真っ直ぐに目を向けてくる裏表のない「私」に、安心感を抱けたのだと思う。

先生は死んだ気で生きようとするが、先生はちゃんと生きていたと私は思う。最期先生の心は罪という縄を少しほどき、「私」という光に自らを委ねた。委ねるまでに先生はどれ程の葛藤を重ねただろうか。自らの罪から逃れる行為ではないか、純真な「私」に泥をかけるとも言える行為ではないか：迷いに苦しんだ末、孤独にした世界を許し「私」を招き入れた。

生きている人は安心感を求め孤独を淋しがる。先生も死んだ気で生きていこうとするが、最期自分を罪から許し、「私」という安心感を求めた。だから先生はやっぱりまだ心のある、血の通った温かい生きた人間だったのだと思う。そしてまだ心のある人間だったからこそここまで罪に縛られたのだ。私はそんな先生に言いたい。「先生には「ごころ」があり、生きていました。」

審査講評

先生の「こころ」の内面をよくとらえており、先生は生きていたとする内容は、しっかりした文章で説得力がある。

《中学生の部》

新潮社賞

認めてくれる存在

和洋九段女子中学校 1年

雨宮 緋那

作品名『坊っちゃん』

選んだ一行

清はおれのことを欲がなくて、まっすぐな気性だと言
って、ほめるが、ほめられるおれよりも、ほめる本人の
ほうがりっぱな人間だ。

「清はおれのことを欲がなくて、まっすぐな気性だと言って、ほめるが、ほめられるおれよりも、ほめる本人のほうがりっぱな人間だ。」これは、夏目漱石『坊っちゃん』のなかで、私の心に最も

深く残った一文だ。

無鉄砲でせっかちで癪癪持ち。いたずらばかりで町内では乱暴者の悪太郎とつまはじきにされている坊っちゃん。両親さえも彼をもてあまし、愛想を尽かしている。

全く評判が悪い坊っちゃんだが、ただ一人、坊っちゃんの良いところを見つけ、ほめてくれる人がいた。長年、坊っちゃんの家で働いている女中の清である。

「あなたはまっすぐでよいご気性だ。」両親やその他の人々の眼には、坊っちゃんの悪い面ばかりが映るのに、清だけは、その奥にある彼の清廉な気性を見抜く眼を持っていた。清は何かと坊っちゃんを気遣い、無条件の愛情を注いでくれたが、この頃の坊っちゃんは清の行為が理解できず、お世辞と感じ、不審にさえ思っていた。

なぜ、彼は清の愛情を素直に受け入れることができなかったのだろう。人に好かれるたちでないときらめ、まるで木の端のように扱われるのに慣れきってしまった坊っちゃん。彼は、人の評価を丸呑みして、自分がたいした者でないかのように思い込み、本来持っている良さに気付けなかったのかも知れない。

そんな彼が、清の心を本当に理解するのは、学校を卒業して、教師として松山に赴任したときである。東京育ちで、鎌倉以外遠出をしたことが無かった坊っちゃんにとって、松山の生活は、それまでとは大きくかけ離れたものであった。

生活習慣の違いや人間関係で苦悩する毎日だったが、折に触れて

思い出すのは清のことだった。そして、初めて清の愛情を理解し、そのありがたみを感じるのである。私が挙げた一文は、この時の坊っちゃんの気持ちを表したものである。

松山での一癖も二癖もある人々との交流を通して、坊っちゃんは観察眼を養い、まっすぐな自分の気性がいかに良いものであるか、認めることができた。だからこそ、最初から正しく自分を評価してくれた清の尊さに気づき、その愛情を素直に受け入れることができたのだろう。

自分を認めてくれる存在。清のような人がいることで、人は自分に自信をもって生きていくことができるのではないだろうか。そして、自分を大切にし、他人も大切にできる人になれるのではないかと思う。

清が生涯坊っちゃんを気遣ったように、坊っちゃんもまた、清を気遣った。清が傍らにいてくれた坊っちゃんの人生は、彼の言うように、けっして損ばかりではなかったと思う。

審査講評

清という存在が坊っちゃんにとっていかに大事だったかについて深く考え、「自分を認めてくれる存在」の大切さという普遍的な問題に到達している。

《中学生の部》

優秀賞

猫の目

新宿区立牛込第二中学校 2年

有賀 温

作品名 『吾輩は猫である』

選んだ一行

文明が進むに従って殺伐の気がなくなる、個人と個人の交際がおだやかになるなど普通というが大間違い

名前のない猫はどのような気持ちだったのだろう。「名前はまだない」と言うだけに、いつかつけてもらえると思っていたのだろう。名前がなくともこの猫は幸せだっただろう。毎日毎日、飽きることのないほど面白い人間が観察でき、話が聞ける。猫が人間について評価し文句を言うなど聞いたことはないが。猫の視点で書かれた『吾輩は猫である』、この本は私にとって新しい問題集となった。苦沙弥、寒月、独仙そして迷亭の会話の中に、私が共感できることがある。「文明が進むに従って殺伐の気がなくなる、個人と個人の交際がおだやかになるなど普通というが大間違い」。文明は私た

ち人間への一つの問いである。文明は生活を便利にしていく。しかし、人の心は少しずつ狭くしていく。もっと楽に暮らしたいという衝動にかられ、目先の利益にとらわれ、いつしか自己中心的に考えるようになってしまった。また、自分のコンプレックスや、他人に対する嫉妬が強くなる。このまま文明が進むのは嫌だという苦沙弥達も発展途上の文明の中で暮らしている。苦沙弥の教える英語は文明の発達により伝わってきたものの一つだ。文明の発達した社会に生まれ育った私たちが、そこから抜け出すのは容易ではない。テレビ、パソコン、電気のある平成の時代で暮らす私が、何もない縄文時代へと時代が戻ったら、すぐに死んでしまっただろう。それに、文明は個人の問題ではない。ただ便利になればいいのに、その便利さを悪い方へと進ませているのは今の人類だ。戦争で使う兵器は力が増し、規模もかなり大きくなった。世界がインターネットでつながっていても互いの欲望を満たすために争う。文明は何のために発達したのだろうか。

私たちには何が必要なのだろう。こう考えた時に、私の頭に浮かんだのはこの本だ。『吾輩は猫である』この本自体が答えなのだろう。「人間を観察する猫」がヒントだ。つまり「客観的に見る」ということだ。自分達自身を外から見ることで、課題が次々と見つかり、文明は良い方向へと進むだろう。

夏目漱石の本を読んで、文明について考えると夢にも思っていなかった。抵抗のある明治頃の言葉、そして数々の知らない語句の

ある夏目漱石の本は、私にとって参考書であり問題集である。本からいくつものことを学ぶと同時に、いくつもの問を私に投げかけてくる。答えを見つけないのは時間がかかる。しかしそれはとてもわくわくするのだ。解けた後の達成感は何とも言えない。それに難しい問題は解く過程で知識を私に与えてくれる。

『吾輩は猫である』は一つ人生において大切なことを教えてくれた。「客観視」だ。文明の問題についての答えはまだまだある。それを見つけることが、この本を読んだ私の使命だと思う。

審査講評

書き手の主張がしっかり文章に反映している。「客観的に見る」ことの大切さを漱石の作品から理解している。漱石の文明批評を自分のものにしていく。

『草枕』が手放せない私

鎌倉市立大船中学校 2年

熊木 ひと美

作品名『草枕』

選んだ一行

山路を登りながら、こう考えた。智に働けば角が立つ。情に棹させば流される。意地を通せば窮屈だ。兎角に人の世は住みにくい。住みにくさが高じると、安い所へ引き越したくなる。どこへ越しても住みにくいと悟った時、詩が生まれて、画が出来る。

「山路を登りながら、こう考えた。智に働けば角が立つ。情に棹させば流される。意地を通せば窮屈だ。兎角に人の世は住みにくい。住みにくさが高じると、安い所へ引き越したくなる。どこへ越しても住みにくいと悟った時、詩が生まれて、画が出来る。」

私がこの文と出会ったのは、かなり前だ。夏目漱石の『草枕』の文章とは知らず、いやわからないくらい幼いころだったと思う。物

心つく前から本の読み聞かせをしてくれた母が、絵本や物語だけでなく、母が好きな文章も聞かせていたらしい。その中に、この文章もあったというわけだ。従って、文豪・夏目漱石の『草枕』という作品から入って知ったわけではない。

最近になって、じっくりといろいろな本を読むようになって、「昔どこかで読んだような……」「聞いたような……」という感覚で懐かしさに包まれる。『草枕』もその一冊だ。読んでいくと正直、青年と那美とのやり取りや、心の機微に共感することは、今の私にとって難しい。でも全体を通して、情景が目には浮かぶ。閉じては開き、開いては閉じながら読んでいく。共感できなくても、読みたくなる不思議さに心が刺激される。何だろう……、このざわざわする気持ち。そんな中、今も昔も、人間というものはそう変わらないのではないか、と思えてきた。今を生きる中学生の私でも住みにくいな、と感じる日常があるからだ。冒頭に引用した文章には、その後、少しの間も住みやすくしようではないか、そのために芸術はあり、心を豊かにしてくれるのだからという思いが語られている。そこで私は、現代中学生版・漱石に「なりすまして」みる。

「通学路を歩きながら、こう考えた。理屈を言えば怒られる。気を許すとつけ込まれる。意地を通せば嫌われる。兎角に中学生は生きにくい。生きにくさが高じると誰も知らないところに行きたくなる。どこへ行っても同じだと悟った時、本に出会って、読書する。」
学校はいろんな性格の先生や仲間がいて、共感したり反発しあっ

たりする。嫌われないようにと気を遣いすぎて、くたびれたりイライラしたり…。家では親子げんかもする。日常は考えてみるとこの繰り返し。そんな時、私は本の世界の扉を開ける。私にとっての芸術は本の世界。異空間に身を置くことで、辛い気持ちも救われる。夏目漱石の『草枕』…。この世界を本当に理解できるのはいつなのか、いや理解なんて出来ないかも知れないけれど、なぜだろう…。私が手放せない一冊だ。

審査講評

中学生としての自分の考えがきちんと書かれている。ユーモアがあり、正直に書かれた、好感が持てる文章である。独特のものが見方がある。

《中学生の部》

佳作

わたしが選ぶ漱石の一行

新宿区立牛込第三中学校 1年

樋高 立人

作品名『坊っちゃん』

選んだ一行

親譲りのむてっぽうで子どもるときから、そんなかりしている。

わたしが選ぶ漱石の作品中の一行は、『坊っちゃん』の最初の一文。「親ゆずりのむてっぽうで子どもるときから、そんなかりしている。」だ。

なぜこの一文を選んだかと言うと、第一に、主人公坊っちゃんの子供のころから先生になり、その後にもまで続く、元気あふれる感じと前へと突っ走ってしまい失敗してしまう、二つの人物像をぎゅーとつめ込んだ文だからだ。二つの人物像をつめ込んだこの一文に私は、坊っちゃんに興味を持って読むことができた。『坊っちゃん』を読むきっかけをこの一文が作った。

第二に、「親ゆずりのむてっぼうで」の部分が、主人公坊っちゃんに真っすぐな一本のぶれない心を表現しているのが良い。「むてっぼうで」の所が、考え無しにから自分の信念にそってというイメージがつけられる。表現するのが、難しい味わい深い部分。坊っちゃんの一本気で、何にも屈しない所が非常に印象に残った。

そして、むてっぼうな所が、変な知恵を感じさせず、前述したようにじゅんすいな所が表現されている。坊っちゃんの少し知恵の欠けた部分が、『坊っちゃん』という作品をおもしろくしていると思う。私は、坊っちゃんの一本気でじゅんすいな所にひかれた。

第三に、「そんなばかりしている。」が、坊っちゃんの人物像を顕著に示している。一本気で知恵の足りない結果、損の多い人生を歩んだことをしっかり表している。坊っちゃんのたくさんのひかれる所が、坊っちゃんにとって損になることが多い。しかし、そうであるがゆえに、坊っちゃんは様々なことを体験した。坊っちゃんの様々な体験あつての、『坊っちゃん』という作品だと思う。そのようなことを感じさせるから、私はこの一文がおきにいりの一つである。

以上三つが、私が「親ゆずりのむてっぼうで、子どものときから、そんなばかりしている。」を選んだ理由だ。坊っちゃんの人物像のありとあらゆることをつめ込み、『坊っちゃん』という作品の根であり、土台でもあるこの一文が私の中でとても、心に深く残っている。『坊っちゃん』の作品の中で、最も興味深く、味わい深い一文である。

《中学生の部》

佳作

振り向ける存在

新宿区立落合中学校 1年

青葉 萌奈美

作品名『坊っちゃん』

選んだ一行

汽車がよっぽど動きだしてから、もう大丈夫だろうと思
って、窓から首を出して振り向いたらやっぱり立ってい
た。なんだかたいへん小さく見えた。

この一本道がいつまでも続けばいいのに……。祖母の家から帰
る時、いつもこう思います。なぜなら、家の前で手を振ってくれて
いる祖父母が遠ざかり、曲がり角で見えなくなってしまふ瞬間が一
番悲しいからです。

夏目漱石の作品『坊っちゃん』の主人公が、教師になるため四国
の学校へ旅立ち、清と別れる時もこんな気持ちだったと思います。
「汽車がよっぽど動き出してから、もう大丈夫だろうと思って、
窓から首を出して振り向いたら、やっぱり立っていた。なんだかた

いへん小さく見えた。」

私はこの部分に坊っちゃんと清の強い愛を感じました。なぜかと言うと、坊っちゃんが振り向くということは、清にまだいてほしいという期待と、きつといてくれるという確信があったと思ったからです。人は、親しい誰かと別れる時、きつと振り向いて手を振りながら行くと思います。振り向くということは、その人への想いがあるということであり、また、絶対に相手も振り向いてくれるという確かな信頼があるとも言えます。私の周りには、そういった信頼関係にある人がたくさんいます。今まで、それを当たり前のように思っていました。しかし今回、そういう人が周りに一人でもいるというのは幸せなことだと感じました。

また、清が小さく見えたというのは、坊っちゃんの気持ちからだと思います。坊っちゃんが学生から社会人へと成長するのと同様に、今まで母のように包んでくれた清の存在が小さくなったということを表していると思います。そして、両親や兄弟から愛されていなかった自分を、ただ一人優しく見守ってくれていた清を残し、四国へ行くことの申し訳なさからだとも思います。

今回、この『坊っちゃん』を読んで、一人でも自分の事を信じて励ましてくれる人がいれば、人はきちんとした人生を歩んでいけないのではないかと思いました。なぜなら、坊っちゃんは、とうてい人から好かれるたちでないときらめていましたが、いつもほめてくれる清がいたので、教師という道へ進むことができたと教えたから

です。私も、そういう存在を大事にして感謝して生きていきたいです。

《中学生の部》

佳作

人生の勉強中

新宿区立新宿中学校 1年

宇津木 佑果

作品名『道草』

選んだ一行

離ればいくら親しくってもそれきりになる代わりに、一緒にいさえすれば、たとえ敵同士でもどうにかこうにかなるものだ。

人間が生きていくうえで必要な物は何か？ 皆さんそれぞれ考える事は違うと思うが、私は、衣食住と友人だと思う。誰も一人では生きてゆけない。人と関わり合って、沢山の事を経験し、学んでいくのである。私も小学校で社会のルールや人との関わりを沢山経験し、学んできた。きつとそれは、人が生まれたときから始まり、

死ぬまで続くのだろうか。

夏目漱石の『道草』という作品の中の文章中に「離ればいくら親しくってもそれきりになる代わりに、一緒にいさえすれば、たとえ敵同士でもどうにかこうにかなるものだ。つまりそれが人間なんだろう。」という言葉がある。

今の私にこの言葉はびったりだと感じた。小学校の頃、すごく仲の良かった友人がいた。正直言って、その友人と離れることが想像できなかった。しかし、その子は家庭の事情で転校して行ってしまった。その頃の私は、まだ携帯を持たせてもらえず、手紙でやりとりをしていた。最初のうちは返事もすぐ返ってきたが、月日が経つにつれて、返事がなかなか返ってこなくなつた。

夏目漱石のあの言葉を知るまでは「なぜ、あの子はもう返事をくれないのだろうか。私のことが嫌いにでもなったのだろうか。」などとネガティブな考えばかりしていた。しかしあの言葉を見て、考え方が変わった。「あの子も私も今の生活になれたんだ。これも人生の大切な勉強の一つだ。」とポジティブに考えられるようになった。

今もまだ、人生の勉強中だ。私も三年後には、今一緒にクラスメイトと離れ、それぞれの道を進んでゆく。もしかしたらそこで、敵となる子もいるかもしれない。しかし、いくら敵でもずっと一緒にいれば、良い所が見えてくるものだ。人間とは、良い所も悪い所も持ち合わせているものである。つまり、仲良くできない相手など居

ないのだ。

これから先、沢山の人と出会い、別れを繰り返すだろう。その中で苦手な人も出てくるかもしれない。しかし、それは私が、相手の良い所をまだ知らないからである。

どんな人でも、関わってみると、自分が思っていた人間のイメージがくつがえされるだろう。

《中学生の部》

佳作

私のところと他人のところ

学習院女子中等科 3年

金杉 もなみ

作品名『ところ』

選んだ一行

私は寂寞でした。何処からも切り離されて世の中にたった一人住んでいるような気のした事も能くありました。

それは誰もが持っているものであるが、他人にはそう簡単に見る事が出来ない。しかし、先生のところの叫びはひしひしと伝わってきた。先生は人を信じたいのに人を疑い続けたいいけない、孤独

な世界から抜け出したい、と欲っていたのだろう。自分すら信じる事が出来ないというのは辛かったと思う。

先生の場合、Kへの罪悪感と妻への愛情の板ばさみになっていた。叔父に欺かれた時、先生は人のところには悪がある事を知った。でも、自分自身は彼らのような人間ではない、と欲っていた。自分で自分を信じていたからだろう。自分は他の人間とは違う立派な人間なのだ、という自負もあったと思う。だからこそ、Kによって、自分も叔父と同じようなところを持つ事を知った時、先生の、人を、自分を信じるころは崩れ落ちた。衝撃的、では言い表せないくらいにショックだったろう。先生は信じられるものを無くしてあがいて、ようやく信じてても良いのかな、と思える人に出会えた。それが「私」だ。しかし、最愛の妻へ本当の事や自分のころを教えようとはしなかった。私にはそれが、妻を守るという名目で自分を守っているように見えた。

多くの人は大小それぞれの悪いころを持っているかもしれない。それは世間体によって抑えられている。つまり、誰もが偽善者と等しい。誰かに本当の自分の姿を気づいて欲しい、正直でいたい、何より人を信じたいという感情は、誰もが持っているころだと思ふ。でも、孤独を恐れてそのころを隠して自分を偽っている。それが、大多数の人間だと思ふ。

私自身もその大多数のなかの一人だろう。人のころはもろい。孤独の苦しみを前にして簡単に傷ついてしまう。実際、先生も苦し

んでいた。そして、死の道だけが自分に残された自由だとして自ら死を選んでしまった。先生のころは純粹すぎた。

人を信じるというのは、どことなく温かい雰囲気を持ち安心させられる。だから人を信じたいのに信じる事が出来ない、疑うしか出来ない、というのはころを不安にさせる。

恋、裏切り、孤独、苦しみは今の世の中にもあると思ふ。孤独と向き合った先生は立派だったかもしれない。しかし、苦しみから解放される手段として、死を選んで欲しくは無かった。それは苦しみから逃げるだけだと思ふからだ。そして、人のころを救えるのは、変えられるのは、人のころだけだと思ふ。

何故、先生は寂寞になってまで「世の中にたった一人住んでいるような」状況を貰いたのか。それは人を信じるころを知りたかったからだろう。では、人を信じるとは何だったのか。それは人から信じられるという事ではないだろうか。人は弱い。ころも命も儂い。そんな人間達を満たすものが信じるという事だろう。人を信じる事、人に信じて貰う事は難しいと思ふ。

自分で見ることでできない自分

目白研心中学校 3年

鞠子 うらら

作品名 『吾輩は猫である』

選んだ一行

然し事實は覚がなくても存在する事があるから困る。

「然し事實は覚がなくても存在する事があるから困る。」

私は時々、自分は自分のことをどのくらい知っているのだろうかと思う。もしかしたら、自分以上に私のことを分かっている人がいるかもしれない。無意識のうちに吐いた嘘や言葉、表情で誰かを傷つけたとしたら、それは自分一人では知りうることでできない。私は小さい頃、友人に「言葉がきつい」と言われたことがある。今まで誰かにそんな風に言われたことがなかったから気がつかなかったが、今思うとそれまでに自分の言葉でどのくらいの人を傷つけてきたのかわからない。無意識のうちに人を傷つけてしまうのは悲しいような気もするけれど、それをちゃんと教えてくれる誰かの存在がある

なら、悪いことばかりではないなと私は思う。人が鏡を見ても自分の本当の顔がわからないように、自分がどんなに頑張っても見えないものはたくさんある。それは言葉や表情などの他人に対してのこともそうだが、自分に対してのこともある。無意識のうちに自分の中に色々なものをためこんで、急に体にあらわれたりする。私はいつも、相手に対して思っていることや不満などを、言わずに飲み込み、自分の中にためこんでしまうクセがどうやらあるらしい。そんな風のためこんでいる自覚は全く無いのだが、色々なものがストレスとなりたまって、よく体にでる。私が選んだ一文に、物語の中でこめられた意味とはだいぶ違う気もするが、この一文は色々なとらえ方ができるなと思います、この文を選んだ。無意識というのは恐ろしいが、鏡と向かい合ってもわからないなら人と隣り合わせて、互いに気づき教え合えたら、この一文のように困らずにいられるのではないかと思った。

言葉

暁星中学校 1年

篠崎 海斗

作品名『坊っちゃん』

選んだ一行

履歴なんか構うもんですか、履歴より義理が大切です

「親譲りの無鉄砲で子供の時から損ばかりしている。」

僕は、この言葉に誘われ、『坊っちゃん』の本を手にした。ペー
ジをめくる、ずっと前から何度も耳にしてきた冒頭の一文。僕は、
無鉄砲という言葉の弾むような響きが、とても気に入っていた。

ワクワクした気持ちで読み始めた僕は、歯切れのよい文章とリズ
ミカルな話の展開に、時間が経つのを忘れ、まるで本の世界に、こ
っそり、もぐり込んでいるような気がした。

面白おかしいエピソードや、シーンと胸が熱くなるようなエピソ
ード、ハラハラドキドキするエピソード……。そんな数あるエピソ
ードの中、僕が一番好きな一行は、

「履歴なんか構うもんですか、履歴より義理が大切です」

と、坊っちゃんが狸に威勢よく啖呵を切るシーンだ。坊っちゃんと山嵐は、赤シャツの策略にはまり、日清戦争の祝勝会場で、中学校と師範学校のケンカに巻き込まれ、新聞を賑わすことに。その責任として、山嵐一人だけが、狸に辞職するよう促された。そんな不公平な処遇に憤慨した坊っちゃんは、狸に談判する。このシーンで、次々、飛び出す坊っちゃんの言葉は、江戸っ子らしく、とても痛快で清々しい。自分の利益よりも山嵐との友情を大切に思う坊っちゃんは、男らしくて、格好良かった。正義感が強く、向こう見ずで、感情のおもむくまま突っ走る。そんな坊っちゃんは、良き理解者、清の言う通り本当に裏表のない真っ直ぐな人だ。

坊っちゃんは、本音と建前の区別や後先のことを考えず、思ったことや考えたことを正直に、口にする。時には、少し失敗して、ハラハラさせられることもあるが、本心をぶつけ合うことで、山嵐のようにかけがえのない友人関係を築くこともある。今、僕が、安心して、感情をぶつけられることができるのは、唯一、両親だけだ。友達とは、時々、ケンカをし、気持ちをぶつけ合うことはあるが、僕はどこかでブレーキをかけ、本心を隠してしまう。きっと、嫌われるのが怖いのだと思う。坊っちゃんのように、どんなことも、どんな相手にも、正直なことばかり口にしていては、人間関係に亀裂を生じることもあるが、信頼関係を築くには、時として、相手を信じて自分の感情をぶつける勇気が必要なのかもしれない。

僕は、『坊っちゃん』を通し、人と人とのつながりで、言葉は、とても大切な役割りを果していると実感した。話し方や声のトーン、言葉の使い方で、伝わり方や相手の気持ちは変わる。僕は、伝えたい気持ちが相手に真っ直ぐ伝わるよう、一つ一つの言葉を大切に使えるようになりたい、そう思った。

《中学生の部》

佳作

山嵐の大演説

暁星中学校 1年

鄭 弘教

作品名『坊っちゃん』
選んだ一行

私は教頭及びその他諸君の御説には全然不同意であります。

「私は教頭及びその他諸君の御説には全然不同意であります。」

山嵐のこの一文が出てきた時、私の『坊っちゃん』という作品に対する姿勢は大きく変わりました。最初は、特に感情移入することもなく、見たことや感じたことを愚痴混じりに描写する主人公のぶ

つぶつとした語り口にただ笑いがこみ上げていました。

「ところで、これは作者の自伝なのだろうか。」などと思いつつ軽い気持ちで読んでいました。そして、第六章に入り、問題の会議の場面でも、昔の人達のうやうやしい言い方や、持って回った言い方のこっけいなやりとりを、私はどこか本の外側からおかしく眺めるような姿勢でしたが、この山嵐の意外な発言とそれに続く立派な演説によって、私はこの小説をとて身近なものに感じるようになりました。

それまでの場面でも、なんとなく言い訳やまわりくどい言い方をする周囲の人たちに比べて、山嵐の言い方には他を圧倒する力がありました。

実は、この発言の少し前に、坊っちゃんも「そんな頓珍漢な、処分は大嫌いです」と言っているのですが、これは全く説得力がなく、すぐに、赤シャツ党の先生方にやんわりと否定されたのですが、その直後に、同じことを毅然とした知的な表現で言い直し、坊っちゃんへの危機を救ったのが、会議のちょっと前まで大げんかをしていた山嵐だったというのが、この場面により際立った印象を与えました。

私は、この一文に続く言葉の数々も、とても印象的でした。決してその場の雰囲気や物事を簡単に曲げたり人に合わせたりせず、正しいことは正しい、間違っていることは、例え相手が学生であっても見過ごしたり甘やかしたりしてはいけない、そんな山嵐の実直な人柄がよく伝わりました。それに比べると坊っちゃんはまだ仕事を

始めたばかりで、同じことを思っても表現の深さが違います。まるで中学に入学したばかりの私のような幼さがあります。

それでも、この瞬間、二人は何か心から通じ合うものができたと思いました。そして私も坊っちゃんと同山嵐コンビの応援団のような気持ちになりました。その後、二人が学校で大活躍することを予想したのですが、現実はその単純な話にはならず、その点でもこの作品は深い印象を私に与えました。

《中学生の部》

佳作

猫の時節

筑波大学附属中学校 3年

谷口 啓太

作品名『吾輩は猫である』

選んだ一行

まあ気を永く猫の時節を待つがよかろう。

「猫の時節」が来るだなんて、考えてみれば思わず笑ってしまう。どうやら猫は我々を「神様」だなんてちっとも思っていないみたい

だ。我々が猫の世界を見るように、猫は人間を眺める。もし、猫にも高い知能があれば、ほんとにこんな風なのではないかと妙に納得してしまう。

宮沢賢治の代表作、『注文の多い料理店』にも猫が登場する。山猫が、狩りをしに山まで来た二人の若者を逆に料理しようとして、彼らに一泡吹かせる。一方、漱石先生が登場させる猫は、人を食べるなどという野蛮なことはしない。だがその観察眼は、ふと私達を不安にさせる。今、この瞬間を猫が見ていたらどう思うの？ この社会は猫の眼にはどう映っているの？

溢れるユーモアのなかにも、ぴりっとするものがある。日本人が見よう見まねで西洋のまねをする姿、権威にひれ伏す人々、実体のない「大和魂」。「吾輩」にはよほど滑稽に思えたらしい。猫の生活は決して楽ではない。寿命も決して長くなく、簡単なことで死んでしまう。人間は冷たい。だが、猫はひがんだりはしない。気長に「猫の時節」を待つ余裕がある。

時は日露戦争が終わらんとする頃。漱石の別の小説『三四郎』には、日本には富士山のほかに見るものはない、と豪語する男が出てくる。日露戦争以後こんなことをいう人間に出会うとは、と三四郎は不快に思う。その男は、これからは日本が発展するだろうという意見には、こう反論する。

「滅びるね」

夏目漱石は、日本に未来はない、と思っていたのだろう。矛盾だ

らけの世の中に嫌気がさしていたのかもしれない。だから当時の日本を猫の眼を通して描き、皮肉たっぷりこの小説を書き上げたのだ。

だが彼がこの小説にこめた思いは、不安や憤りだけなのか。それは違う。彼自身、自分がつむぐ一文一文に笑いを堪えきれなかったのではないか。この猫には、なんと少しでも不条理な世の中を変えてやるという気概はない。というよりは、どうにもならない現実を受け入れる「諦め」の気持ちと「楽観主義」とが共存している。それは漱石の心の中にもあった素直な気持ちに違いない。

今を生きる私達だって、行き場のない思いを抱えるときもある。そんなときは、猫になればいい。気を永くして「猫の時節」を待つ「吾輩」に。そうすれば、どうしようもない世界でも、なんとかやっていけると先行きを楽観できる。そんな時間を持つことも悪くない。

《中学生の部》

佳作

拝啓 夏目漱石先生へ『文鳥』を読んで

戸板中学校 1年

高野 薫子

作品名『文鳥』

選んだ一行

家人が餌を遣らないものだから、文鳥はどうとう死んでしまった。

拝啓 夏目漱石先生

東京は今、野分の季節を迎えています。天国の漱石先生におかれましては、お健やかにお過ごしのことと存じます。

さて、私はこのたび『文鳥』を読みました。小説は長くてくじけたので、短さとタイトルのかわいさで選びました。あなたがお亡くなりになって八十五年もたってから生まれた者なのですが、読者ではあるので、生意気な発言をお許しください。

『文鳥』は読んでいくうちに、ずいずい引き込まれていきました。三重吉さんに指導されている漱石先生や、愛しい文鳥の餌や水を取

り換えている漱石先生の姿が目に見えるようで、くすくす笑いながら読めました。

私が一番印象深かった一行はこれです。

「家人が餌を遣らないものだから、文鳥はとうとう死んでしまっ
た。」

文鳥が死んでしまった時の漱石先生の気持ちはわかります。死んで
いるのを見て、呆然とする気持ちや、誰かのせいにしたくなる気
持ちも。本当は自分にだって文鳥を死なせた責任があるとわかって
いるのだけれど、悲しみから逃げたくて誰かのせいになっているので
すね。余計悲しいです。そして三重吉さんは、そのことがわかって
いるから「文鳥は可愛想なことをしましたとあるばかりで家人が悪
いとも残酷だともいっこう書いてなかった」のですね。

漱石先生の文鳥はとても可愛らしかったのですね。小鳥は飼った
ことがなく、朝、道路にいる雀くらいしか見たことはありませんが、
白い羽にやや紅色の嘴は、とても可愛らしいです。この文鳥、とい
うか小鳥に似た人なんてそうそういないと思いますが、いるものだ
ったのですね。漱石先生のいう、その紫の帯の女性は私には美しい
というより、小鳥のように可愛らしい人と思われれます。しかし、い
たずらをするというのやはり女性としてあまり許せません。本人
がいいと言ったのかもしれませんが、漱石先生のしたことは今でい
う「セクハラ」だと思います。

おっと、文鳥の方に話を戻させてもらいます。文鳥はとてもきれ

いな声でなく鳥だと以前聞いたことがあります。「千代千代」とは
また鳴き声も可愛らしいです。直前まで元気だったのに死んでしま
うなんてとても悲しくなります。硬くなった文鳥は鳴きません。そ
れはわかかっていても、「お願い。また鳴いて」と、私は読みながら
祈ってしまいました。漱石先生もそうでしたよね、きっと。

最後に筆子ちゃんが、植木屋さんとお墓をつくる場面がほんの少
しだけ悲しみを和らげてくれました。

漱石先生、天国で素直に文鳥に謝ってあげてくださいね。それで
は、さようなら。

敬具

九月十九日

夏目漱石先生

高野 薫 子

人間の世界

早稲田大学高等学院中学部 1年

前村 泰伸

作品名『三四郎』

選んだ一行

三四郎には三つの世界ができた。

夏目漱石の『三四郎』を意味付けする一文それは四章途中の「三四郎には三つの世界ができた。」ではないだろうか。

三つの世界とは一つ目、故郷九州の田舎の世界。そして二つ目、野々宮や広田先生のいる学問の世界。さらに三つ目は美禰子との恋など華美あふれる世界だ。

このように主人公、三四郎は人や物事の出会いを三つの世界に分類し、まとめている。

この分類は三四郎が上京する時から少しずつ生まれてきている。故郷九州と東京との差の現状に驚く場面もそうである。つまり、色々な世界が組み合わさって三四郎は生きているのだ。

さて、人や物事によって色々な世界が形成されているのは『三四郎』の世界だけだろうか。

私は現在、部活で野球、クラブチームではラグビーをしているが、野球での世界、ラグビーでの世界、学校での世界、家の中での世界……とたくさんの世界がある。それぞれ自分の立場も違うし、関わる人も同じではない。

このようにして見ると生きているということの本質は様々な世界の集合体であるのだ。つまり、『三四郎』は私たちの人生を純粋にえがいた物語であるのではないだろうか。

もう一つ気付いたことがある。三四郎が広田先生や野々宮、美禰子らに会い仲を深めるうちに第一の世界、故郷が拡張しているのではないかということである。

つまり、最初九州と東京の違いに驚いていた三四郎も生活に慣れ、東京も一つの故郷へと変わっていったのではないだろうかという事だ。上京して来た時は常に緊張して気を休める場所がなかったであろう。しかし、広田先生の家や池で様々な人と出会い、交流していくうちに気をゆるすことのできる、安心感というものが徐々に生まれてきたのではないだろうか。

また、最後に迷羊（ストレイシープ）と二回繰り返す場面がある。この迷羊は、美禰子がよく使う単語である。第三の世界である美禰子との恋は実らず、美禰子は違う人と結婚することになる。つまりこの時、二人にはまた新しい世界が生まれ、旅立っていくこととな

る。

このように時間が経ったり立場が変わったりすると世界が新しく生まれたり、今までの世界がなくなっていくたりする。そして、こうして世界が変わる度に今までの世界が恋しくなったりするのだ。

『三四郎』は人生の本質を純粹に表している物語であると感じた。こうして私たちが生きているのは、様々な世界が集合しているからであるということ。そして常にその世界は拡張し、新しい世界が生れていくということ。

『三四郎』は出会いによって世界が広がる事を教えてくれる、漱石の「名作」だと思った。

《中学生の部》

佳作

二つのいころ

日本女子大学附属中学校 3年

安本 萌恵

作品名『いころ』

選んだ一行

その時漸やく悲しい気分に誘われる事が出来たのです。

「悲しい気分に誘われる」とはどういうことなのだろう。私はこの一文を読みながらなぜか心にひっかかった。「悲しい気分になった」で良かったのではないかと思ったのだ。

自分のせいでKが自殺してしまったという現実の中で、悲しいという気持ちを忘れていた先生だったが、お嬢さんや奥さんの涙でようやくこころを取り戻せたということなのだろうか。先生はその時の気持ちを振り返り、自分は本当に悲しんだのだろうか、くつろいだ気持ちになっただけではないのかと思ったのだろう。その時に自分の中にある「もう一つの自分」を見ていたからこそ、そう表現したのではないかと私は感じた。

人には常に二つの「いころ」が存在するのではないだろうか。時によってその「いころ」は違うが、一つは心の奥にある欲望、もう一つは善良な人であるための理性といったものだろうか。いつもは人を思いやり行動することができた先生だが、Kが自殺し、第一に考えたことは遺書の内容だった。自分のことが悪く書かれていて、この先の自分の幸せがなくなってしまうのではないかと。恋というもの、人間の欲望が表れやすいと言うが、先生はお嬢さんを手に入れるために欲望が何よりも先に出てしまったのだろう。先生は、自分が信じていた叔父に裏切られた経験から、自分は人を裏切らないようにしようと思っていたはずだ。その自分が親友のKを裏切ってしまったことに驚き、落胆したに違いない。そして自分の中にあ

るもう一つの自分をしっかりと自覚した瞬間だったのだと思う。

しかし、なぜ先生はこんなにも過去に縛られてしまったのだろうか。あいにく私にはそのような経験はないけれど、このような話はドラマなどでよくある話である。もしKのことを考え、自分の気持ちにふたをしてお嬢さんを諦めていたら、それはそれで一生後悔が残ったと思う。自分が先生の立場だったら、後悔したり、反省したりすると思うが、先生のようにはならないと思う。先生と私の生きた時代が違うからなのだろうか。

人が生きていく上で、欲望を持つことは当たり前前のことであると思う。必ずしも理性で抑えなければならないということはないと思う。欲があるからこそ、人は成長していくのだと思う。むしろ、大切な「こころ」ではないだろうか。

欲望。理性。どちらも自分の中に存在する大切な「こころ」なのである。時にはぶつかり合い葛藤することもあるが、その二つがあってこそ自分なのだ。この一行はそんなふうを考えさせられる一行であった。

《中学生の部》

佳作

「諦め」という武器

日本女子大学附属中学校 3年

矢野 杏奈

作品名『硝子戸の中』

選んだ一行

「死は生よりも尊い」 斯ういう言葉が近頃では絶えず私の胸を往来するようになった。

「死は生よりも尊い」 斯ういう言葉が近頃では絶えず私の胸を往来するようになった。

これはいつか辿り着かねばならない「死」という生の末路が迫ってきていた漱石が書いた硝子戸の中の八章の文である。初めはこの一節に彼の「諦め」を悟った。

生きることは何よりも単純であり、それに意義などない。慣習として本能として生きていくにすぎない。漱石は死を目前にそう感じていた。生は不確実であり、死は確実である。

生きることに対しての苦悶はそこにあったと私は確信している。

それ故の素直さ、こだわりを捨てきった正直さが作品に滲み出ているからだ。死は自我の喪失ではない。ただ肉体的な終わりが来ることであるだけなのだ。漱石が敬愛した森鷗外の言葉。漱石と鷗外はその時代の文学者とは死生観が違った。自殺する文学者が多い中、二人は大きな苦悩を抱きながらも決して自殺することはなかった。しかし、漱石はこの世に生ある限り悩み続ける他、道はないことを悟っていた。

彼は死を肯定することなく、また否定もしない。それはなぜか。彼はそれが尊く生きることに関わることだと確信していたからだと思ふ。作品の中に織り込まれた彼の死生観に私は非常に感銘を受けた。彼は生きるうちに悩み、苦しみ、考えに考えを重ねて自らの求めているものに近づく束の間の我を感じることに生きがいを見出していた。ただ死が尊いのではない、精一杯生きた成れの果てというべき死を尊いと言っているのだ。私は彼の死生観にも死生観にも大きく影響されてきた。死は消滅ではなく出現であり、新たな始まりであるのだということ意識するだけで生きている今にどこことなく充実感を得られる。それが彼の遺した言葉の素晴らしさであり、彼の再起とも言えるだろう。私の心に漱石が現れた。

こころの門をくぐり抜け、そこにある人間の利己を明暗として受け止め、時に夢の世界にひたり、幻想を抱きながらあちこち道草をく、人間の本能である私利私欲とエゴイズムに悩みつづけること。漱石の作品から感じる人間の魅力がある。それは彼の人間臭さだ。

理性や知性だけでは語りきれない人間臭さが彼の作品の根っこである。則天去私という生き方とは如何様のものなのか。意味ある人生をどう生き、死をどう受け止めるか。彼はまだまだ私に難問をつきつけてくる。これから生きていき沢山の経験をする中で答えにふさわしいものを見つけていきたい。

《中学生の部》

佳作

それぞれの個人の尊重

高山市立東山中学校 1年

丸山 遼太郎

作品名『私の個人主義』
選んだ一行

義務心を持っていない自由は本当の自由ではない

兄の名前は金之助。夏目漱石の本名からもりました。それで、父はよく夏目漱石の話を読みますが、僕たちにとって、古い小説は読みにくいので、読んでいません。

「私の個人主義」という講演の内容を、父は解説付きで紹介して

くれました。「言い訳や謙遜の前置きが長い。そこはパス。だけど本題には、今の時代の人たちも考えなければならぬことがある。」と、父は言いました。

そのなかでも強調したのが「義務心を持っていない自由は本当の自由ではない」の箇所です。「どんなことか、良く考えてみる。」と言われ、周りのことに当てはめてみました。

自由に暮らしていて義務を果たさない人はたくさんいます。ひとりで暮らすことはできません。人は社会のなかで、チームの一員として暮らしていると思います。

僕はサッカー部員です。プレーの中では、ほかの選手がいることも常に意識して、生かし合えるようにしないと、チームとしての力が発揮できません。お互いに生かし合う気持ちが無いと、自分も生かしてもらえません。自由なプレーをしたときにも、チームの中で最善の方法は何かということと同時に考えた方が、良い結果は出ます。

自由な生き方というと、いいことのようにですが、義務を果たさなければ、その生き方はバツでしょう。自由と身勝手は違います。

父から個人主義の悪いかたち「利己主義」の例を聞きました。町内会未加入の人が、ごみステーションを設置してほしいと父に頼んだ話です。市役所に交渉したら、頼んだ人が今度は「計画の場所は家に近すぎるので、変更してほしい。」と言って来たそうです。結局、頼まれていた父が、駐車場にしようとしていた自分の土地を提

供して解決しました。

町内会へ入らないことも、自分が思ったままを主張するのも自由な行動と言えます。だけど、義務心が無い自由は、目指して良い自由ではないし「利己主義」になりがちです。

ごみステーションは町内会が管理しているので、設置を頼んだ人は、管理の義務を分担することが無いまま、ごみだけは自由に出しているようです。義務心が無い自由です。

サッカーでは「リスクペクトしなさい。」と、よく言われます。相手を尊敬することです。自分自身の存在を大事にしようためには、ほかの人の存在を意識しなければならないし、自分の自由を大事にするためには、ほかの人の自由も大事にしてあげなければなりませんと思います。それぞれの人の立場を認めることは、味方のなかでも敵に対しても大事です。

僕はこれから、いろいろなことを思った通り自由にやりたいです。ただ、クラスでも、サッカーチームでも、自分個人の自由を守るために、集団の中で自分の義務は何かをいつも考えて行こうと思っています。

「私の個人主義」とは「それぞれの人の立場や自由を尊重し、自分の義務を果せ。」という夏目漱石の考えではないでしょうか。

美しい喜び、そんな心持への憧憬

光塩女子学院高等科 2年

小島 麻

作品名『硝子戸の中』

選んだ一行

どうして私の悪口を自分で肯定するようなこの挨拶が、
それ程自然に、それ程雑作なく、それ程拘泥わずに、
するすると私の咽喉を滑り越したものでしょうか。私はそ
の時透明な好い心持がした。

「透明な好い心持」。純白の美しさに染め抜かれてしまったような、私の大好きな一節である。病身の漱石、厭世家の漱石の印象は、この瞬間に「するすると」私の心の中から飛びだしていった。そして新たな、爽やかな風が心の中を吹き抜けた。

漱石の高等学校時代の親友・太田達人は常に鷹揚とした人格者であったそうだ。漱石は彼のことを、「敬愛に価する長者として認められていた」。何しろ秋のある日、二人が話しながら散歩をしていると、

樹の枝から小さな葉がはらりと落ちたのを見て「あっ悟った」と叫んでしまう人物なのだ。漱石はすっかり驚いてしまって、暫く言葉が出なかったという。

そんな友人と漱石が久しぶりに会う場面である。漱石が座敷へ行って先に席に着いていると、廊下伝いに部屋の入口まで達人が歩いてきた。それで座蒲団の上に「きちんと坐っている私（漱石）」を見るなり、開口一番、こう言うのである。「いやに澄ましているな」。

この達人の物言いからも、二人が互いのことをよく知り合っているのがうかがえる。親友とて長らく会っていないければ、私も何となく緊張してしまいそうな気がする。特に相手が達人——名は体を表すというように、人生を達観している——のような人物だとしたら、自分の考えていることをすぐに見抜かれるのではないかと思ってしまう。だが達人は人の弱みにつけ込むようなことはしない。誠実な漱石を知っているのだ。だからこそ、そう畏まるんじゃない、疲れてしまおうよ、と労いの思いを包み込んで「からかう」という形を取ったのだ。

真面目に言葉を受け取った漱石も、彼の意を解しただろう。同時に、友人に先手を取られてしまったと感じた。互いに自身を糊塗したりしない、暗黙の信頼感が彼の「悪口」によって引き出されてきたのだから。漱石も照れ臭さを、彼によってくり貫かれた自分自身の内に押し隠すようにして、負けじと答えた。

「うん」。友人の「悪口」に被せて。何だかスリリングな二人のや

り取りである。漱石は瞬間、他人に対してのみならず自身の心情に
対して非常に素直である自分の一面を強く感じる。大人同士であっ
て、夾雑物も構えも全く無い、純白な空気を感ずる。そして、新鮮
な喜びを胸に抱くのだ。

「どうして私の悪口を自分で肯定するようなこの挨拶が、それ程
自然に、それ程雑作なく、それほど拘泥わずに、するすると私の
咽喉を滑り越したものだろうか。私はその時透明な好い心持がし
た。」漱石の豊かで繊細な感受性が伝わってくるのも、私がこのく
だりが素敵だと思ふ理由である。

人間関係において本当の「悪口」しか言えない、聞かない私には
彼らのような友人関係は一種の憧れでもある。私も、漱石や達人の
ような心をもちたい。たまにはびりびりするのをやめて、友人の言
葉に「うん」とだけ答えてみようか。その時には私の心にもきっと
自分で透明な風を吹かせられると思うのだ。

審査講評

読み終えて、こちらにも「好い心持」がする文章。温かい筆づ
かいがいい。共感を呼ぶ作品となっている。

《高校生の部》

朝日新聞社賞

有始の美

女子学院高等学校 1年

高島 珠美

作品名『坊っちゃん』

選んだ一行

親譲りの無鉄砲で子供の時から損ばかりして居る。

「親譲りの無鉄砲で子供の時から損ばかりして居る。」

これは言わずと知れた『坊っちゃん』のあまりにも有名な冒頭で
ある。同時にこれが、私にとっての漱石のベストでもある。私の中
での漱石の作品の魅力は何と言ってもその特徴的な冒頭にある。す
なわち、漱石と言えば冒頭、冒頭といえば漱石なのだ。

特にこの『坊っちゃん』の冒頭は、読み始めるやいなやその作品
にぐっと掴まれていくようなものを感じたのを覚えている。具体的
に言うと、いささか唐突な始まり方に対して、一瞬途中から読み始
めたのかという錯覚をまず抱いたが、その後やはりこれが正真正銘
の始まりなのだと思ふし、そしてこの後の展開を期待せずにはいら

れなくなるという境地に達したのだ。

とにかく、この「親譲り」というのが面白い。良くも悪くも性分というのは親から受け継ぐものであり、自分ではどうしようもないものだとは半分開き直っているような感じがあるが、決して否定的な雰囲気はそこにはなく、むしろまんざらでもないといった感じがひしひしと伝わってくる。「無鉄砲」という言葉も、最近ではこれに当てはまるような子供たちも少なくなっただけで普段あまり耳にしなくなっただけだが、何か微笑ましくて憎めないという気持ちが湧き上がってきた。そして、その「無鉄砲」さが災いして「子供の時から損ばかりして居る」と言うのだが、そこにはまるで悲壮感が漂っていない。かといって、不幸自慢している風でもない。いや、むしろ当の本人は全く意に介していない様子さえ窺える。自分はこれを地で行くのだという誇らしささえ感じさせ、読む者の心を捉えて離さない。

何事も始まりは肝心要だが、漱石の作品ほど、冒頭の一文に喜怒哀楽を論じられるものはないであろう。漱石の作品の冒頭は潔く、それでいて奥深さがある。冒頭から読む者の心をその行間に誘ってしまふ何かがあるのだ。だからこそ、漱石の冒頭の綴り方にはそれだけの魅力があるのだ。

作品というものは、より多くの人々の感性に触れることによって咀嚼され、噛めば噛むほど深い味わいを醸し出すようになる。そしてその十人十色な味わいが互いに繋がり合うことで、作品はますます彩豊かなものへと生まれ変わっていくのだ。同様にして、私たち

が漱石の冒頭に心を通わせることにより、その心が彼の魂と共鳴して和音が積み重ねられ、さらに奥行き深い響きを持ったものへと化身させていくことになるのだ。

漱石は始めの一文に、その深くて広い、壮大な、それでいて躍動感あふれる世界に読み手を引きずりこむ、いや、読み手が引きずりこまれに行ってしまうような力を吹き込んでいるのだ。

審査講評

冒頭の一文を実に丁寧に考えている。文にリズムがあり、しっかり書かれている。

夏目漱石 〳夢十夜第二夜〵を読んで

鎌倉女子大学高等部 2年

杉山 佳菜子

作品名『夢十夜』

選んだ一行

趙州曰く無と。

夢十夜の第二夜では侍が和尚から、「無が侍のお前には足りない。」と言われ、『無』とは何か必死に考え、無を悟ろうとします。侍は、もし出来なかった時には次の刻つまり一時間後に切腹すると決意します。

私が第二夜を読んだ中で一番心に残ったのが、「趙州曰く無と。」という場面です。私なりの解釈で読み解くとするならば、おそらく無心になることが大切だ、雑念を抱かなくなる事で悟りを開く事が出来ると言いたかったのだと思います。

私は弓道部に所属していますが、例えば弓道という競技は四本を一セットに引くもので、試合でも一本目の矢、初矢と言いますが、

その一本の存在は大きく、初矢を外すと、その後立て直すことはかなり至難の業であります。その時に思い出される『無』です。顧問の先生にもよく、「苦しいときにいつも通りにできる奴が勝つ。」でもそのいつも通りが試合でも出せる場合というのは、練習でも同じ緊張感で臨んで取り組み、淡々と心のブレなく引いている奴だ。」と言われます。本当に全くその通りで、試合では練習のような余裕のある思考は緊張によって掻き消され、ひどい結果になったりするのです。そこでいつも（あそこでああしていれば……。）と後悔します。それと同様にどのような事にもどっしりと腰を構えて座っている、何事にも感情が大きく振り回されるような事の無い人になるというのが今も昔も長生きする秘訣だと思います。なぜならば、この話の最後の部分に「無はちっとも現前しない。ただ好加減に坐っていたようである。ところへ忽然隣屋敷の時計がチーンと鳴り始めた。はっと思った。右の手をすぐ短刀にかけた。時計が二つ目をチーンと打った。」とあるように、この侍は先程書いた通りならば次の刻、つまり、もうここで自刃しているはずだからです。

そしてこの侍は、一番最初に大きなミスを犯していると私は思います。まず、『無』になる、と考えている時点で間違っていて、侍は『無』について考えるのでは無く、ただ肩の力を抜いて何も考えず楽に楽にしていれば良かったのだと思います。何故なら寝て次の朝にでも和尚に、「無の極地とは寝ることだった。」とでも言えば、和尚も呆れを通り越して笑っていたと思います。本当に頭が固いな

と思うと同時に、一つ一つの決心が重いなと思いました。私はこの侍のような決心をする度胸も無いですが、それでも死ぬ必要は無く、結局は和尚が正しかったのだと思います。

審査講評

漱石が暗示する無の境地を理解し、弓道の世界と照らし合せて作品を自分のものになっている。

《高校生の部》

新潮社賞

漱石が最後に伝えたかったことは

湘南白百合学園高等学校 3年

藤井 葉子

作品名『こころ』

選んだ一行

妻が己れの過去に対して持つ記憶を、なるべく純白に保存しておいて遣りたいのが私の唯一の希望なのです

私は高校二年の夏休みに、宿題として初めて『こころ』を読んだ。下「先生と遺書」では、Kと「私」という二人の大学生が自分の抑え切れない欲望と対峙する様子が、結局人間は自分のために生きていくという寂しい現実を教えてくれた。途中で他人に対する誠実な心が顔を出しても、最後には狡猾な心が勝ってしまったり、自己満足に終わってしまったりするのだ。特に印象的だったのは、Kが自殺した後の「私」の行動である。友人が自殺したのは自分の責任だとわかっていても、つつい世間体を気にして、わざと遺書をみんなの目につくように元のとおり机上に置いた。私はそれほど追い詰めに嫌われるかもしれない」と思って正直な態度に出られなかったことがあるという点では共感できた。漱石は、人間が自分でも気づかないような細かい心の動きを直視して、それを簡潔なようだが濃厚な言葉で表現していて、さすがだと思った。しかし、そんな心の深い闇の部分まで読者の胸の前に突きつけられると、自分の心をすべて読まれている気がして、恐ろしくもあった。だから本を読み進めていく作業は、まるで薄暗くなった小道を一人で歩くようなものだった。

ところが、最後の一行に差し当たったとき、私は急に光に照らされたような気がした。最初にそう感じたのは、きっと「純白」という美しい言葉が突然登場したからだろう。しかし何度か読み直してみても、やはりこの最後の文は特別なものだった。それは、こ

れ以前まで描かれてきたエゴイズムのテーマに当てはまらない描写だったからである。

「私」が生きている間に妻に秘密を打ち明けてしまえば、「私」は嫌な男だと思われてしまう。妻の悲しむ顔が自分を苦しませる。それは自分にとって不都合なことだ。しかし、この遺書は自分が死ぬだとしても妻を悲しませたくないという強い思いを述べて結ばれている。これは自分の利害を超えた問題だと私は感じた。

「私」とお嬢さんとの最初の恋やその婚約は、若さゆえに衝動に任せて進んでしまった部分もあるのだろう。結果「罪悪」というまでに自分を苦しめたのだから。しかし結婚してから今までその深い傷を心に長年負い続けてきたからこそ、彼女を汚い過去の現実から本当に守ってやりたいという気持ちが生じ、利己主義的な恋をはるかに超えた相手本位の真実の愛が芽生えたのではないだろうか。

漱石は、自分本位に生きる人間の弱さを描いてきた。しかし『こちら』は、本来人は見返りがなくても純粋に他人を愛することができるといふ一種の希望を示して結んでいる作品なのではないかと私は考える。

審査講評

『こちら』を主題にした数多くの作品の中で、一番特色ある見方を書いている。人間としての弱さと自分の利害を越えた他人への愛情の両面を良く感じとり、表現している。

《高校生の部》

優 秀 賞

冷たく悲しげな漱石の横顔

女子学院高等学校 2年

船木 菜々子

作品名『思い出す事など』

選んだ一行

住み悪いとのみ観じた世界に忽ち暖かな風が吹いた。

「住み悪いとのみ観じた世界に忽ち暖かな風が吹いた。」(『思い出すことなど』)の中の一行である。修善寺の大患で生死の境を彷徨った漱石が自分を見舞ってくれる人々がいることに感謝し、願わくは自らも善良な人間になりたいと考え、自らの幸福を思う節である。話はその後、漱石自身よりも壮絶で冷酷な生と死の境を三段階に味わったドフトイエフスキーを想像した漱石が、自ら味わったこの生の喜びが、終始失われぬのならば、ドフトイエフスキーは自己の幸福に対して、生涯感謝することを忘れぬ人であったと続く。私はそれまで、漱石を読んで何か掴み難いものを感じていた。漱石は自分や他人のところに深く切り込んでいくにも拘らず、それを

読んだ私には漱石自身という人間は、冷たい人工物のようになってしまふ。そもそも、小説家はその人自身の人間を表に出す義務は無いし、寧ろそれは抹殺されることもある。特に漱石は俯瞰の姿勢を崩さないから、先の悩みはごく自然に解決される。

しかし、漱石の小説は作品を読み進める毎に、作品が作品を補い、次第に私に漱石という人への愛着のようなものを持たせるのもまた事実である。同時に、漱石の小説に出てくる人物たちに、批判の対象だった人物にせよ、私は人間味と愛着を感じる。それも自然な形で。だから、私は漱石の小説が好きなのかもしれない。

大患後の漱石の作品は、より深刻な自己と他者が描き出そうときれている。私は、漱石の孤独に触れる度、陳腐な言い方をすれば、漱石が可哀想に思える。しかし、これらの作品にいる人物たちは、より人間味を増し苦しみながらも生きている。『道草』での健三の細君、お住がどうしても良い妻であり、母であるようにしか思えないように。死んじまえと云いたくなった健三にしろ。そこには確かに漱石の影はちらつくものの、健三は漱石そのものではない。漱石はまだ救われない。

ところで、漱石の小説に、決定的な一行はない。と私は思う。それらしきものを引っ張り出したところで、すぐにそれは姿を変えてしまふ。そのことは漱石の小説の構造うんぬんを紐解くかどうかにかかっている。だが、私は、『思い出す事など』を読んで嬉しくなった。漱石に不図訪れた暖かい風は、私のところにもやってきてある

手触りをくれた。漱石はやっぱり、人間をどこまでも愛していたんだろうなあ。自分や他人を疑って疑って、それでも見捨てはしなかった。出来なかった。そう私は思えるようになった。そして、また漱石の作品たちを読み直したくなるのだ。小説は直接目に見える形で私に何かをくれる訳ではない。だけど、単なる時を楽しむ娯楽でもない。人を信じたり愛したりする手掛りを、そっとくれるような気がする。漱石の描く人間模様は今もちっとも変わらず、私の周りを囲んでいる。

審査講評

漱石の心情をよく想像してまとめている。作品と自分の関係がよく理解され、丹念に表現されている。

本から教わること

鎌倉女子大学高等部 2年

三島 葵

作品名『坊っちゃん』

選んだ一行

だから清の墓は小日向の養源寺にある。

「だから」最初、どうしてもこの接続詞が使われているのか理解出来ず、おかしな文章だと思っていた。なぜなら、身近な身内の死に立ち会った経験をしたことがなく、真剣に読もうという気持ちが足りなかったからだ。

この物語は昔ながらの文章で言い回しや言葉遣いも難しく、巻末の付録についていた語注は、とてもありがたかった。語注でも補いきれていない言葉は自分で調べて、読みきれたときの達成感は、凄く気持ちのいいものだった。だから、余計に最後の一文の「だから」が理解出来ないことが悔しかった。きっと途中から「読みきりたい」そんな風な気持ちに変わってしまったから、大事なことを見

落としてしまったのだと思う。

どうしても理解したくて、私はもう一度読んだ。今度は見落しのないように、真剣に。そうして私は、坊っちゃんと清が「親族」ではなく、「坊っちゃんと下女」ということに気付いた。そして、お墓というのは、その親族が埋葬されていくということも。

このことに気付いたとき、「なるほど」と思ったと同時に、「二人の信頼関係は凄いな、羨ましいな」と思った。

「だから」の文の前には、「清が死んだら、坊っちゃんのお寺へ埋めて下さい。お墓のなかで坊っちゃんの来るのを楽しみに待っています」と言っていた。だから清の墓は小日向の養源寺にある。」となっている。親族でもない清を墓に埋めたのは、父や母、兄からも見捨てられていた坊っちゃんに、唯一味方してくれた清だからこそ、人付き合いが下手で無鉄砲な坊っちゃんも、心を許して信頼していたのではないかなと思った。いざれ好きな人が出来て、実家や地元を離れて行くときに、こんな二人のように、離れていても信頼し合える関係を家族と築いていたら素敵だなと羨ましかった。

こう考えるようになったら、今までであった祝勝会の余興で起こった喧嘩や、赤シャツと野だいこの件も、坊っちゃんが清のもとへ帰るための差し金だったのではないかとも思える。

もともと漱石の作品の中から『坊っちゃん』を選んだのは、主人公が私の目指している数学教師だったから。そんな些細なきっかけで読んだのに、内容は思っていたものとは全然違うけれど、私は

『坊っちゃん』に、本は「読みきる」ことが全てではなく、真剣に内容を読むことで、新しい発見があることを教えてもらった。

次は、夢を叶えたとき。今とは違う立場に立って読むことで、また新しい発見ができるのではないかなと思った。

審査講評

「だから」という短い言葉を出発点に、いままであまり気づかれなかった点を指摘し、独特の見方を示した。視点も文章も素直な作品である。

《高校生の部》

佳作

不可解を美しさに

東京都立戸山高等学校 1年

川内 彩可

作品名『夢十夜』

選んだ一行

自分が百合から顔を離す拍子に思わず、遠い空を見たら、
暁の星がたった一つ瞬いていた。

「夢」と割り切ってしまったからこそ、この物語はこんなにも美しい。「夢」だからこそ、私達はこの物語をあるがままに受け入れ、味わうことができるのだと思う。

夏目漱石の『夢十夜・第一夜』には、「夢」でなくては説明できないような表現が多く登場する。これが漱石の実際に見た「夢」（眠っている間に見る夢である）であったかはさておき、「夢」と定義されていないから純粋に物語を感じることはできなかったにちがいない。いいかえれば、『夢十夜』の物語には程良い「夢らしさ」が漂っていて、現実味がないのである。

『夢十夜・第一夜』に登場するのは語り手の男と、親しい関係にあるであろう女だ。女は、今から自分は死ぬので、亡骸を埋めて墓のそばで百年待っていてほしい、きつと逢いに来るから、と男に言い残して死んでいく。男が待っていると墓の上に百合の花が咲いた。見上げた空に星が瞬いていたので、男は百年が経っていたことを知った。

さて、これは四ページ弱の短い物語である。百年という歳月が一瞬で過ぎるかのようだ。しかし、淡々と進む物語のリズムは心地良い。漱石はそのリズムの中に、美しい色彩の情景を織り混ぜている。女の望んだ通りに大きな真珠貝で墓穴を掘る男の姿や、墓の上に咲いた「真白な百合」の細かな動きまで、鮮明に描かれている。さらに、ただの石を「星の破片」と表現する漱石の感性は見上げたもの

である。

私の一行、それはこの物語で唯一考えさせられた「自分が百合から顔を離す拍子に思わず、遠い空を見たら、暁の星がたった一つ瞬いていた。」という一行である。男はこれによって百年が経っていたことを知る。なぜだろうか。

百年の間、男は何度も「赤い日」が東から出て西へ落ちるのを見ていた。夜明けは何度も経験したはずだ。しかし、男の本当の夜明けは「暁の星」を見たその時だったのかもしれない。「真白な百合」が死んだ女の化身であると、それまでには登場していない「暁の星」を見て、ようやく気付いたのかもしれない。

自分なりの答えが出た時、「ああ、女は約束を守ったのだ。」と思った。もし漱石が「真白な百合は女であると分かった。」などと書いていたら面白くも何ともない。繊細な描写によって暗示させるからこそ、物語は「夢」として輝くのだろう。

不可解な物語を「夢」として描くことによって成立させ、人々の詮索を避け、美しく保つ。その漱石の手法に感服した。

いずれにしても、漱石のこの物語は美しい「夢」そのものであったと、私としては言わざるを得ないのである。

《高校生の部》

佳作

善悪と我執

学習院女子高等科 2年

小黒 ひかる

作品名『こころ』

選んだ一行

平生はみんな善人なんです、少なくともみんな普通の人間なんです。それが、いざという間際に、急に悪人になるんだから恐ろしいのです。

「平生はみんな善人なんです、少なくともみんな普通の人間なんです。それが、いざという間際に、急に悪人になるんだから恐ろしいのです。」

私は初め、これは主人公が自分の叔父を指して言ったのだと解釈していた。しかし読み進めていくうちに主人公が親友に対して行ったことを省みているのだと考え、そして読み終わった時に、これは漱石がこの作品を通して読者に伝えたかったことではないかと思っただ。なぜなら主人公もまた、いざという間際に急に悪人になってし

まった人の一人であるからだ。親友の最期の時まで自らの利益を優先させてしまった主人公は、彼を傷付けたその時から何度も全てを打ち明け謝ろうとする。しかし、遂にそれを果たすことはできなかった。ほんの少しの勇気を出すことができなかったために……。

他人よりも自分を優先させてしまった経験は人であれば誰しもが持っているものだと私は思う。だからこそ読者は皆、主人公の迷い、罪悪感、葛藤、苦しみ、そういった「こころ」に共感し同じ世界を共有することができるのだと思う。利己心から主人公が発した、たったの一言が彼の親友の人生そして彼自身の人生を短いものにしてしまう。親友の死によって彼は初めて自分のしてしまったことの大さに気が付く。この時、私は人の人生のあまりのあっけなさ、残酷さに言葉を失った。こんな事はあって良いはずがない、せめてもう一度主人公に親友へ謝罪する機会を与えるべきだ、そう思った。身から出た錆と言ってしまうえばそれまでだが、誰しもがこの主人公になり得るのだということを漱石は私達に示しているのだと思う。

またこの部分で述べられている、生まれながらの悪人などいない、しかし皆悪人になる要素は持っているのだ、という考えには非常に納得した。世の中には善人と悪人とがいるのではなく、何かあった場合に自らへの執着を捨てることができる人とそうすることができない人との二つに分かれるのだというこの考えに。何かあった場合と言っても、とても疲れている時に目の前にお年寄りが立っていらっしやったら席を譲ることができるかどうかなど私達の日常の中に

よくある場面もこれに含まれるだろう。いかなる場合においても真っ先に自然と他の人のことを考えることができる人、それが立派な大人であると私は思う。この作品を通して私は、人の「こころ」は無数の糸が絡まり合った状態のように複雑に成されていること、他者のその絡まり合いを細かく捉えるのは本当に難しいということ、改めて学んだ。そして、人がどれほど自分を優先させてしまうかも。しかし、自分を優先させた後は罪悪感や後悔といった感情が自分を苦しめるだけである。私は、たとえその時に辛い思いをしても後に満足感や達成感が得られる道を選んで生きていきたいと思う。

先生のメッセージ

学習院女子高等科 2年

河合 亜美

作品名『こころ』

選んだ一行

私は今自分で自分の心臓を破って、その血をあなたの顔に浴びせかけようとしています。私の鼓動が停った時、あなたの胸に新しい命が宿ることができるなら満足です。

「私は今自分で自分の心臓を破って、その血をあなたの顔に浴びせかけようとしているのです。私の鼓動が停った時、あなたの胸に新しい命が宿る事ができるなら満足です。」

私はこの一行に、先生がなぜ死を決意したのか、先生の心の変化が現れていると思った。

先生は叔父に裏切られたことを憎んでいたが、後に自分も、Kを裏切ってしまう。自分が恨んでいた裏切りを、自分でもしてしまっ

た。そんな闇をずっと、ひとり抱えて生きていた。

先生の自殺の原因として、乃木希典の自殺が考えられる。西南戦争後三十五年間の機会を待っていた乃木希典と、Kの死後闇を抱え続けた自分を重ね合わせたのだ。しかし、私は、これはただ最後の一押しをしただけと考える。「私」という存在ができたこと、これこそが自殺を選んだ原因である。

私が選んだこの一行にある、「心臓」とは、Kを裏切ってしまったという過去を閉じ込めるものであり、「血」とは先生の人生の比喩である。この一行には、先生の自分の人生から新たに教訓を得て欲しいという願いがこもっている。また、「血」「心臓」「新しい命」といった情熱的な言葉に、「教え」の複雑さが表れていると思う。本当の思想が受け継がれるとき、そこには過去全部がさらけ出される必要があるのだ。

これは、「私」がある日郊外で言った「先生の過去が生み出した思想だから、私は重きを置くのです」という言葉に対する先生の答えだと考えられる。子供がおらず、思想家らしい執筆活動もしなかった先生だが、信頼し自分の過去を伝えられる「私」という人物に出会えた事、これが自殺をする覚悟を持たせた。

先生は、頻繁に先生の家を訪れるようになった私に対し、「私は寂しい人間です。」と言っている。先生は裏切り、裏切られることを嫌い、世間を遠ざけていた。しかし、「私」の「先生の過去から教を乞いたい」と自分の心へ踏み込んでくる情熱的な態度、若い

のに懲りずに自分の所へ通い続ける様子、それによって、信頼することができたのだ。「いざという間に、人は普通の人から悪人に変わってしまう」と、人を信用しなかった先生が、最後には「私」という自分を任せられる相手を見つけた。先生は自殺でしか自分の罪に報いることができなかったという点では悲劇的な人生だったかもしれないが、「私」に出会えたことで救われたと思う。

このように、先生の遺書のこの一行は、自殺を選んだ意味、先生の願い、「私」の価値など、先生から「私」へのメッセージが含まれている。「血」や「心臓」といった言葉での、この情熱的な一行は、先生の生きてきた最後の希望「私」への願いが込められており、「教える」ことの本当の姿を見せてくれる。

《高校生の部》

佳作

人生を誰が決めるか

暁星高等学校 2年

佐竹 隆博

作品名『それから』

選んだ一行

人間の目的は、生まれた本人が、本人自身につくったものでなければならぬ。

「人間の目的は、生まれた本人が、本人自身につくったものでなければならぬ。」

小説『それから』のこの一節が僕の心に残った。

人間は誰であっても、何も持たない真っ新たな状態で生まれてくる。裸で生まれてくるのだ。そして、生きていく中で自分が生涯をかけてやりたいものを探す。生まれた時から使命を負っている人なんていないのである。

しかし、そう簡単には言い切れない。生まれてくる子供自身は何も持っていないが、生んだ親は期待と希望を子供に対し持っている。

る。多かれ少なかれ、どんな親でも自分の子供には何らかのプラスの感情を持つ筈である。それが、子供に重くのしかかる場合もある。枷になる場合もある。下手したら、生まれて来た子を将来なにに「する」かを勝手に決めてしまう親もいる。この子供は、一体誰の人生を歩むことになるのか。自分で選んだ訳でもない道を、いつしか自分で選んだ気になって進んで行く。自分の意志の欠如した抜け殻の人生を過ごしているだけで、結局は他人の意志が支配する、他人の人生なのである。それを自分の人生であるかのように過ごしているに過ぎない。

そもそも、人生とは何なのだろうか。ただ生まれ、ただ死んで行くまでの経過は人生と言えるのだろうか。結局のところ、人はみんな死んでしまうので、わざわざ、その決まりきった展開を「人生」などと仰々しく呼ぶ必要はない筈である。自分が死ぬまでの時間に興味をつけるにはどうすればいいのか。僕は、死ぬ間際に自分の人生を振り返って「自分は生きていた間に、これをしてきた」と言えるようなことがあれば、そこに「人生」が現れてくるのではないかとと思う。死ぬまでの期間をかけて何かをしたのだから、そこにはただ漫然と流れる時間とは違う何かが存在する筈である。人生に目的がついてくるのではなく、目的に人生がついてくるのではないか。だからこそ、その目的すら他人に決められてしまうと、そこに自分の人生は存在しないと、僕は思う。

つまり、自分の人生を賭ける価値のあるもの、自分の人生の目的

というものは、予め持つことの出来るものではなく、自分の人生を振り返った時に自分の人生を賭けたものという結果論として認識されるものではないか。懐古から得られる自分の目的は、自分が何をしてきたか、何を大事にしてきたかに基づくので、自分以外の他人というものは介入することはできない筈だ。過程にいくら他人が関わられても、結果には関われない。自分が生きてきた証、つまり後付けの目的は、確かに、自分で決め、自分で作り上げるしかないのである。

《高校生の部》

佳作

手当り次第第十七字

暁星高等学校 2年

松本 観吾

作品名 『草枕』

選んだ一行

その方便は色々あるが一番手近なのは何でも蚊でも手当り次第第十七字にまとめて見るのが一番いい。

目に見えないものは敢えて見ようとしない。これが「非人情」にものを見る時の見方である。この姿勢で人を観察すると、「利害に気を奪われないから、全力を挙げて彼らの動作を芸術の方面から観察することが出来る。」

画工の言葉である。「画工」と書いて「がこう」とも「えかき」とも読む。画工は『草枕』の主人公である。主人公というが、この物語では事件らしい事件がないので、主人公を主人公だと感じることも少ない。画工の目線で物語が進むから、画工が主人公だと言っただけのことである。

明治になり、東京は文明開化の只中にあった。異国文化に町は華やいだが、「非人情」を好む画工には少し居心地が悪かった。画工が山奥の那古井の温泉宿に逗留したのは、そんな都会の空気から離れ、自然に囲まれた土地で非人情を存分に味わうためであった。木々や花々を観察し、ひばりの鳴き声に聞き入る時はもちろん、人を見る時にも「能や芝居の中の人物を見るような眼鏡で」観察する。すると人は風景に溶け込んで、日常のあらゆる場面が一枚の絵として映るのである。これが非人情に物を見た時の見え方であり、画工がわざわざ旅に出てまで描きたかった絵なのである。都会の騒がしさを思い出し、画工はそして次のように言うのである。

「智に働けば角が立つ。情に棹させば流される。意地を通せば窮屈だ。とかく人の世は住みにくい。」

明治にそれほど人の世が住みづらいなら、画工にとって現代は地

獄か。ただ私達はそんな地獄に住んでいながら、都会の慌ただしさに疲れたからといって画工のようにおいそれと旅に出ることはできない。だからといって非人情を諦めてはならない。画工は非人情に物を見るための簡単な方法を紹介している。

「おのれの感じ、その物を、おのが前に据えつけて、その感じから一步退いて有体に落ち付いて、他人らしくこれを検査する余地さえ作ればいいのである。(中略) その方便はいろいろあるが一番手近なのは何でも蚊でも手当り次第第十七字にまとめてみるのが一番いい。」

詩も嗜んだ画工らしい一節だが、とても簡単である。詩人でなくとも十七字にまとめることぐらいできるものである。

「あと十日。迫り来るかな始業式。」

難題に取り組もうとする時、私達の視界は狭くなる。狭くなっていくことに気付かないこともしばしばである。そこで五七五なのだ。視野を広くしようと意識せずとも、五七五を作ろうとすれば自然と半歩下がって自分を見ることが出来る。非人情の眼鏡のレンズ一枚分の距離が、さっきまでの自分との間に出来る。視界が勝手に広がるのである。

少し息詰まった時、馬鹿馬鹿しく思えても、今の自分を五七五で表してみるのだ。ほら、もう周りが見えるはずだ。時刻は夜中の一時、夏休みはあと九日しかない。

正直に生きようとする心

東京都立国際高等学校 1年

藤井 美月

作品名『こころ』

選んだ一行

その世間体がこの場合、私にとっては非常な重大事件に見えたのです

『こころ』は、人間の意識の中に潜んでいる本性について描いている。それを特に強く感じたのが「K」の自殺の場面である。

幼馴染の「K」の遺体を目の当たりにした「先生」は自分が彼の自殺を招いたかと思う、無意識に「K」の遺書に手を伸ばしてしまった。しかし、「予期したような事は何にも書いて」なく、「先生」は「まず助かった」と思ったのである。なぜなら、「世間体がこの場合、私にとっては非常な重大事件に見えた」からだ。この一行に私は深く納得した。

人は自分に都合のいいように行動すると、最終的には自分の重荷

になってしまう。もちろん罪悪なんて感じなければ重荷にはならない。人には必ず善の心があるからこそ言えることだ。

私は何回も人に嘘をついたことがある。なぜか。自分の「世間体」での面子を守るためだ。嘘をつくことで世間的には純粹で善良な人間として見られ続けるが、内面では人として自分は徐々に汚れていく。自己嫌悪に陥った私は自尊心さえも失っていき、嘘を繰り返していく。これは、私だけにいえることではない。「先生」もそうである。「先生」は自分の気持ちに対して素直に向き合えず、結果的に「K」をズタズタにして勝とうとした。正直に生きることでできなかった代償としてめでたく結婚をした後も、生涯ずっと「K」に脅かされる」こととなった。私や「先生」のように世間がどう自分を評価し、見ているのかを意識するばかりに都合のいいように生きる人々は社会にあふれかえっている。けれども、私たちと違って「先生」は自分が不当に生きてきたことに気づき、認めている。さらに、償いまでしているのだ。普通の人は自分の過ちを忘れるふりをして生きている。だが、「先生」の場合は「私」に遺書を通して自分の過ちと世間からの評価を気にしていたことを明かしている。私たちとは違うこの「先生」の姿勢に私はとても感動したのだ。これが、この一行が私の心に深く残った理由である。

真面目に生きるとは

明星学園高等学校 3年

石井 香穂

作品名 『ころ』

選んだ一行

あなたは本当に真面目なんですか

高校二年生の時に、現代文の授業で初めて『ころ』を読んだ。『坊っちゃん』を先に読んでいた私にとって、『ころ』は同じ夏目漱石という人物が書いたとは思えないほど新鮮な驚きを与えた。『坊っちゃん』とは一味違って、シリアスな雰囲気漂う『ころ』の世界にどんどん引き込まれ、単なる恋愛小説ではなく、ある一人の人物の人生の告白である点に魅力を感じた。私はそんな『ころ』に出てくる「あなたは本当に真面目なんですか」という一行が一番心に残った。

若い「私」は先生と親交を深めていくが、先生との間にはいつまで経っても一線があり、肝心なことを話ってくれない。そのような

先生の態度にしびれを切らし、「私」は先生に包み隠さず本心を語って欲しいと迫る。それに対して先生は、「あなたは真面目か」とたずねた。この場面では不自然なほど「あなたは真面目か」、「本当に真面目か」、「腹の底から真面目か」と聞いている。ここで言っている「真面目」とは謹言実直や真実一路のような意味ではなく、自分と他者の関係性における真面目さを指していると私は思う。では、どのような関係が「真面目」と言えるのだろうか。それは、相手と自分が信頼しあい、決して裏切るようなことがあってはいけないという関係である。つまり、唯一無二の存在を求め、見つけるといふことである。だから、「私」が先生にとって唯一無二の存在であるかを確かめるために、あれほどしつこく「あなたは真面目か」と問うたのだ。先生にとって過去を告白することは非常に深刻なことであり、死をも意味する。それなのに、先生が自分の命と引き換えに過去を打ち明けたのは、「私」という人物を信頼し、唯一無二の存在だと確信したからだ。そして、先生は自分の死を以て、「私」に生きることはどういふことなのかを考えさせたのだ。これから未来のある「私」に今、この時代、この時間、この瞬間を生きることの重要性を示したと言ってもよい。ここで夏目漱石が伝えたかったのは、人と人の関係は決して、形ばかりの軽薄なものや自分の利益を第一に考えるような利己的なものであってはならないということである。さらに、社会の歯車になって生きるこの大切さを忘れてはいけないということであると私は思う。しかし、現在は時代の

移り変わりが目まぐるしく、他者との関係は表面的になってきていて、自分が生きていく意味さえわからなくなっている人も多い。自分と他者との関係が「不真面目」になっているこんな時代だからこそ、みなさんに聞きたい。「あなたは本当に真面目ですか」と。

《高校生の部》

佳作

永遠性

鎌倉女子大学高等部 2年

山口 真由

作品名『夢十夜』

選んだ一行

自分は透き徹るほど深く見えるこの黒目の色沢を眺めて、
これでも死ぬのかと思った。

夢十夜、第一夜の冒頭に女が、静かな声でもう死にますと主人公さらには読み手に語り掛ける。冒頭のこの言葉で誰もがこの女は病気で床に就いている、または寿命が尽きてしまうのかと想像させるに違いない。

だが、次の文で女の容姿には、死を連想させるものがないことを物語る。真白な頬の底に温かい血の色がほどよく差して、唇の色は無論赤い。女の生を実感させる一文だ。さらに大きな潤いのある眼で、長い睫に包まれた中はただ一面に真黒であった。その真黒な眸の奥に、自分の姿が鮮やかに浮かんでいる。

私は、人間の本来あるべき美しさを表していると感じる。人は永遠に美しさが続くことを願う。しかし、年を重ねるごとに美しさをなくしていくということは必然であることも理解している。

女は主人公に若さという人間に平等にある存在を存分に見せびらかしている。それは、現在の若者にも共通する自分自身のアピールであり、自分だけを見て欲しいという執着でもある。

主人公は、いとも簡単に女の美しさにとらわれてしまう。それらをまとめて女への愛を表しているのが、「自分は透き徹るほど深く見えるこの黒目の色沢を眺めて、これでも死ぬのかと思った。」という一文である。主人公は女の永遠の美しさを求め、女が自分の中に消えてしまうことを恐れる。私は、心変わりしてしまう人間の心情と、つなぎとめようと人間の心が交差しているように思う。一度離れてしまったものは元には戻らない、戻ったとしても以前の輝きが再び舞い降りることはないのだ。女は決断する。永遠の美しさ、愛を求めて死というものに向かう。

しかし、女は死を終わりとはとらえていない。通過点に過ぎず永遠の美しさと共に主人公と死の世界に降り立ちたいと考えている。

主人公もそれに答えるように女の死の世界の準備を手伝うことになる。

「死んだら、埋めてください。大きな真珠貝で穴を掘って。そうして天から落ちて来る星の破片を墓標に置いてください。そうして墓の傍に待っていて下さい。また逢いに来ますから。」

主人公は、女の願いを叶え、ひたすら女を待ち続ける。そして、女にとっての究極の美しさである百合として、百年の歳月を越えて男の元に戻ってくる。主人公は女の美しさ、愛を忘れることなく百年の日々を過ごした。主人公もまた、女にとっての死の世界に足を踏み入れたのだ。

主人公が女を求め続けた理由こそ、「自分は透き徹るほど深く見えるこの黒眼の色沢を眺めてこれでも死ぬのかと思った」という文にある。また女が目指した永遠性の手がかりともなるのだ。

《高校生の部》

佳作

私とこころ

熊本県立玉名高等学校 3年

西村 優希

作品名『こころ』

選んだ一行

然し腹の底では、世の中で自分が最も信愛しているたった一人の人間すら、自分を理解していないのかと思うと、悲しかったのです。
理解させる手段があるのに、理解させる勇気が出せないのだと思うと益悲しかったです。

夏目漱石という人名は、誰もが聞いたことがあるだろう。私もその一人だった。しかし、どんな作品を残し、どんな思いを持っているかということは何も知らなかった。そんな時、夏目漱石の『こころ』と出会った。読んでみた最初の感想は、なぜだか不思議な気分という、何とも言い難い気持ちだった。しかし、その気持ちはもう一度読みたい、もっと『こころ』という作品を理解したいという気持ちに繋がっていった。今では、もう読んだ回数は数十回に達した

だろう。そのぐらい『こころ』は私にとって大事な小説である。その中から、選んだ一行「然し腹の底では、世の中で自分が最も信愛しているたった一人の人間すら、自分を理解していかないのかと思うと、悲しかったのです。理解させる手段があるのに、理解させる勇気が出せないのだと思うと益悲しかったのです。」は、初めて読んだ時から忘れられない一行であった。先生の遺書の中でも、Kが自殺した後の先生の人生について語る場面は、読む度に胸が苦しくなった。特に選んだ一行に差し掛かると、思わず涙ぐんでしまう。先生は妻を心から愛しているが、心から理解し合えていない。この矛盾が先生を自殺に追い込んだのだと思う。また、理解し合える手段があるのに勇気が出せない自分の情けなさ、歯痒さ、このような感情が、増々先生自身を苦しめていったのだと感じ取れる。先生は、このように自分を誰にも分かってもらえないまま伝えられないまま、何年間も生きてきたのだ。私は同情などよりも先生が持っている人間のありのままの姿に心からひかれた。先生はきつと優しすぎるほどの心の持ち主で、誰よりも人間の心を見つめていた。心を何よりも大事にしていた。そんな先生だからこそ、本の中の「私」も私自身も、そして他の読者の人もひかれていったのではないかと思う。その先生が死ぬ前に、この世でたった一人だけに自分を理解させることが出来た。それが本の中の「私」である。私はこの本の中の「私」が羨ましくて仕方がない。先生にとって、「私」は特別な存在となり、唯一の理解者となったのである。でも、それと同時に先生は

自ら死を選んだ。先生と「私」の出会いがお互いにとって良いものだったのか悪いものだったのかは、誰にも分からない。でも私は良いものであったと信じたい。

『こころ』という作品は読めば読むほど奥が深い。そして、また人間の温かさが感じとれる。今の世の中は、人間本来の温かさが感じとれなくなってきている。先生や「私」のように心を見つめ、人間らしい温かい付き合いが出来なくなってきている。これは時代のせいとしか言いようがない。そして、こんな時代だからこそ、『こころ』という作品は私の心の中に深く入り込んできたのだろう。この作品との出会いに感謝し、これから先の時代にもぜひ伝えていきたい。